

# 戦後における石川県下漆器製造業の進展

矢ヶ崎 孝 雄

## Development of Lacquer-ware Manufacture in Ishikawa Prefecture after the War

Takao Yagasaki

### はしがき

戦後におけるわが国の漆器製造業を全国的視野から眺めたところ、石川県がその首位の地位を持続してきたが、このことはすでに報じた<sup>1)</sup>。そして、その製品が台所食卓用品を主体としてきた点も特色であった。かような地位を占めてきた石川県の戦後の漆器製造業について、石川県内各産地の進展を本稿ではみようとするものである。

石川県の漆器産地は古い伝統をもって持続してきている。輪島市、金沢市、山中町・加賀市が主産地を形成し、それぞれ特色をもって発展してきている。なお、石川県においてはただ単に漆器の伝統工業が発達するのみでなく、全国的にみても、石川県には多種多様な伝統工業がかつ高度に発達してきている。九谷焼<sup>2)</sup>も著名であり、加賀友禅や大樋焼、金沢・七尾・美川の仏壇、金沢箔・加賀象がんなどのほか、和紙、織物、水引その他極めて多彩である<sup>3)</sup>。これらの工業には零細なもの、消滅したものもあるものの、とくに金沢市に多彩に発達してきた点も特色である。このうち、通産大臣指定の伝統的工艺品には、山中漆器・輪島塗・金沢漆器があり、九谷

焼・加賀友禅と金沢箔（伝統的工藝材料）・金沢仏壇・七尾仏壇など8工艺品が含まれている<sup>4)</sup>。全国では154品目（伝統的工藝材料・工業用品を含む）が指定されている（昭和61年4月1日現在）うちで、石川県が8品目を占めている点からも、その特色が伺われよう。しかも、このうち漆器が3品目あり、これに関連深いものとして金沢箔があり、仏壇もまた製造に漆を用いる点で関係深いものである。石川県の漆器製造業は、単にそれのみで自立するのではなく、関係の伝統工業と結びついて発達してきている点も注目されよう。

ところで、百万石の旧城下町金沢は、伝統工業の拠点であり、その多くは藩政時代の伝統を背景に発達したものであり、上記のように多彩のものがみられる点もうなずかれる。しかし、県下各地にも伝統工業は発達をみており、なかでも漆器は能登半島北端の輪島市、県都の金沢市、それに県南温泉地の山中町・加賀市とに拠点を置くことに注目したい。

以下、この3産地の戦後における進展を統計的に考察しようとするものである。そのあと改めて各論として、各産地の構造を分析していきたいと考えている。なお、論述に先立ち各産地の特色を若干記しておきたい。

輪島市の漆器は「輪島塗」と称され、農村の富農層に膳椀を行商し、注文生産で堅牢な品を製造してきた。現在も高水準の伝統的手法・技術を持続し、高級品の生産に特色をもつ。石川県立輪島漆芸技術研修所はその人材育成の場で、全国的に注目されているものである。漆芸作家の多いことも特色である。金沢市の「金沢漆器」は城下町に発達し、加賀藩の保護奨励も受け、高い技術の工芸品を製作してき、現在もこの伝統を継承している。生産量は少ないが、むしろ美術工芸に秀で、漆芸作家が多い。山中町の「山中漆器」は温泉町の土産物品を多く産し、製品は時代とともに変遷してきた。デザインに新機軸を出す点で勝れ、見込生産で量産してきた点も特色である<sup>5)</sup>。プラスチック素地をいち早く導入し、工業団地を形成し、隣接の加賀市へも同じく団地を発展させた。全国第1位の生産額を誇る産地である。

山中・輪島は全国的にもトップクラスの産地であるが、これに金沢を加えて、3産地はそれぞれに特色をもっている。全国の漆器産地の縮図を石川県下でみるができると思われ、したがって、石川県の漆器産業の研究は興味深く、意義のあるものと考えられる。

## 1 一般的な推移

第二次世界大戦では全く戦災を受けなかった石川県ではあるが、穀倉といわれる水稻の単作地帯にあるにもかかわらず、敗戦直後においては食糧の不足は著しかった。昭和20年にはこのため小中学校、専門学校などは休校したほどであった。かような状況下にあつては、漆器製造もまた不振であり、食糧の生産確保に専念せざるを得なかった。職人の不在、漆・木地その他の原材料なども不足をしており、本格的な漆器生産は営みえなかった。ただ、国内の大都市などは戦災を受け、食器などの日用品は不足していたので、漆器の需要には根強いものがあつた。生産はほそぼそ

と続けられていたのである。

商工省および通商産業省の『工業統計』によれば、昭和20年の石川県漆器生産額は13.3万円で、うち飲食用が12.7万円と圧倒的であつたことは、上述の傾向を示すものといえよう。なお、全国的には第7位の生産額で、とくに誇るべき地位を示してはいなかった。その工場数は2、従業者数は50人という状態で、勿論これは従業者5人以上の事業所を対象とした統計数値ではあるものの、漆器生産の退行は著しかったとみられるのである。ところが工場数は翌22年7、23年6となり、従業者数もそれぞれ108人、210人と増加し、生産復興の姿が認められた。生産額は692万円となり、長野県について全国第2位の生産額を持つに至つたことは、復興のテンポの極めて速かつたことを示しているといえよう。また製造品目では飲食器72万円(10.4%)と少なく、家具及び装飾品が106万円(15.3%)、其ノ他が514万円(74.3%)と圧倒的に多く、生産品目に著しい転換のあつたことも注目される。さらに昭和25年には工場30、従業者233人、出荷額は3,908万円(全国第4位)で、うち食器が3,400万円(87.0%)を占め、再び主要製品目を示すに至つた。当時は社会状態が不安定で、変動の著しいことが漆器生産にも反映され、利潤の多い製品へと動揺してゐたことが知られる。しかし、漸次生産も安定し、着実に進展していった模様で、昭和28年の出荷額は5億4788万円となり、全国第1位を示し、うち食器は4億8765万円(89.0%)を占め、石川県の漆器製造業の主製品となつた。事業所数は従業者4人以上のものが70、従業者は1,372人と増大した。

つぎに昭和30年以降の石川県漆器製造業の推移をみよう。図1は石川県『工業統計』により作成したもので、全事業所を包括したものである。事業所数は昭和30年代に停滞的であつたものの、同39年以降漸増傾向を示した。同45年の減少、同47年の急増がみられるもの

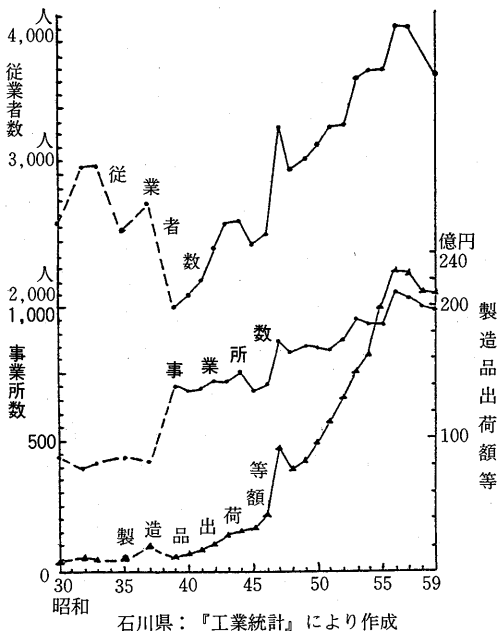


図1 石川県漆器製造業の推移(昭和30～59年)

の、あと増加を辿り、昭和56年の1,051をピークに以後やや減少を示している。従業者数は昭和30年代にむしろ増加を示したものの、同39年には著減し、1,993人と最低を示し、事業所の傾向とは逆相関を示していた点が注目されよう。しかし、これ以降は事業所数の推移と顕著な相関を示しており、昭和56年はピークの4,105人を保持していた。

他方、製造品出荷額は昭和30年以降増加を示しているが、同39年に減少し、11億9647万円とほぼ昭和32年の水準に戻った。このあとは漸増し、同47年の93億9518万円、翌48年は急減して76億6710万円となった。しかし、このあとは増加傾向を示し、100億円台から200億円台に達し、同56年の226億8206万円をピークに200億円台の出荷額を保っている。

石川県の漆器製造業は全国的にも高い地位を保っていることはすでに論じたが<sup>5)</sup>、総括的にみる限り、漸進的な発展を遂げてきたことが認められよう。ただ、昭和39年と同48年とに大きなギャップのあることも注目されよ

う。したがって、ここでは戦後以降現在までを4つの時期に区分して考えてみる事が可能と思われる。すなわち、Ⅰ 昭和20代、Ⅱ 昭和30年代、Ⅲ 昭和40年代(昭和48年まで)、そしてⅣ それ以降とである。この各時期には、それぞれわが国経済動向の大きな潮流が基底にあり、それに対応して各産地の漆器製造業の動きが見られるはずで、石川県下の3産地の漆器製造業もまた特色ある進展をそれぞれ遂げてきたわけである。

## 2 製品の特色

昭和50年代、漆器生産額において、山中は全国的にも第1位を保ち、輪島は第4位につけている<sup>6)</sup>。他方、金沢の漆器生産額は極めて小さい。かような生産額に対して、石川県下各産地の製品ははしがきでもふれたが、種類・質ともにそれぞれ特色を保持してきている点注目される。

ここで伝統的な3産地の特色をさらに明確にみると、昭和初期に石川県下の特産品を手ぎわよくまとめて紹介した中野観象によれば、つぎのようであった<sup>7)</sup>。すなわち、金沢漆器は堅牢で、純美術工芸品であり、京都漆器と称して売捌かれることもある。新規な塗方を考究し、陶器・金属なども合せ作り、家具にも関係する。輪島漆器は堅牢無比であり、沈金・象眼細工や彫刻などを施している。これに対して山中漆器は轆轤物すなわち丸形日用品を主とし、意匠斬新で品質優良の割に価格は低廉である。以上の特色は現在にも通じる面の多いものである。金沢・山中の漆器生産が新しい面を開拓する意向を示す点注目され、輪島が堅牢無比と称し、伝統を保持する点は現在も同様である。ただし、現在は輪島漆器も美術工芸的色彩を濃くし、金沢の特色とも共通するように進展している。山中漆器の低廉性もまた現在に通じるものであり、プラスチック製品、団地形成などへの移行もこの伝統からして、至当と考えられる。



れているのである。プラスチック漆器は時流に応じて製品の変化が著しく、常にヒット商品の開拓をしてきつつあり、それによって産地が存続しているのである<sup>11)</sup>。これについては稿を改め述べることにしたい。

表1によって製品を比較してみよう。漆器の品目は全国的には『工業統計表』で家具と台所・食卓用品、その他と3大分類されているが、その実態は極めて多彩な品目に亘っている。その本来的のものは椀であるが、この椀も用途に応じてさらに多種のあることが知られる。ただ金沢漆器では椀と総括されているが、現実には各種のものが造られているものの、量的には極めて少ない。盆は輪島・金沢で多種があり、酒器も輪島で多様である。菓子器・盛器は山中で多種が造られる。茶道具も多品目あり、とくに輪島に多いが、山中では棗なつめの生産に力が注がれ、全国の70～80%を占め、中級品の市場に浸透している点に特色がある<sup>12)</sup>。弁当箱は3産地とも産するが、飯器は輪島に多品種がみられる。総じて台所・食卓用品は輪島で多彩なものが生産されているとみられる。

箱についても輪島では多様なものが製造され、重箱を除いては小型の家具的なものが多い。轆轤挽を主とする山中ではこの部門の木製漆器が乏しい点も特色といえよう。また喫煙具・花器などは金沢で多種のものが生産される点も注目される。さらに置物・室内調度品・机などは輪島が圧倒的で、金沢で若干を産するものの、山中では欠いている点も特色である。室内調度品類は家具に相当するものといえよう。輪島塗の前記『申出書』によれば、昭和50年当時、その生産は飲食用什器類が37.9%であるのに対し、室内調度品類が39.4%と若干上回り、茶道具13.3%、小物その他が9.4%であり、家具類の比重がかなり高まっていたとみられる。しかし、このあと昭和50～60年の実績では、飲食什器類43%と増加し、室内装飾品は26%に止まり、茶道具

10%となり<sup>4)</sup>、生産額は年により品目に変動のあることが知られる。本来、膳椀などの食器を主体としてきた輪島漆器の伝統からすれば、家具類生産への著しい進展のあったことが認められよう。山中漆器はむしろ小型の什器類で、しかも丸物を主としている点、轆轤挽物の伝統を受けついでいることが知られる。

### 3 生産額の推移

#### (1) 資料について

戦後の石川県下の漆器生産について、産地別に比較できる資料を編年的に得ることは不可能であった。各種の資料から得られた生産額を編年的に輪島・山中につき整理したのが表2である。その数値の類似する点から用いた資料を類別できるが、しかし出典の明示を欠くものが殆んどであり、調査法も不明であり、したがって正確な実態の把握に困難する。しかも、資料によりその金額に著しい差異のあることから、産地ごとの生産額の推移はもちろん、産地間の比較には信頼性を欠く点もあり、慎重な扱いが必要である。

ここで編年的かつ産地別に得られる資料は石川県経済部編『石川県商工要覧』（石川県・石川県商工会議所連合会発行）の資料である。表2でも明らかのように、この資料は他の資料と一致する金額を示す年次もあることから、各書に引用されているとみられる。さらに注目されるのは、昭和52～53年以降『石川県観光物産課事務概要』の数値と合致している点である。

ところで、石川県『工業統計』は全事業所の集計を行なっており、一方、上記の『鉱工業生産統計』は通産省の所定の調査規則に基づく抽出調査結果を示している点で注意を要する。その比較は後掲表4につき後述するが、さらに産地ごとに抽出比率は異なり、山中は抽出率が高く、金沢は低い傾向がある。これは工場規模が関係し、小規模工場の抽出率が低い傾向を示すようである。したがって工業

表2 輪島塗・山中漆器生産額の各種資料による比較  
(昭和20~60年)

(単位:億円)

資料	輪 島 塗				山 中 漆 器				
	【輪島塗】 刊行年 発行所	【石川県の 工業発達 史】 昭41 北陸経済調 査会	【石川県鈷 工業生産統 計】 昭36 石川県	【石川県商 工業要覧】 昭27~60 石川県・石 川県商工会 議所連合会	【山中漆器 とその団 地】 昭44 国民金融公 庫金沢支店	【石川県の 工業発達 史】 昭41 北陸経済調 査会	【石川県鈷 工業生産統 計】 昭36 石川県	【小規模対 策調査報告 書】 昭48 中小企業庁 全国商工連 合会	【石川県商 工業要覧】 昭27~60 石川県・石 川県商工会 議所連合会
昭和20年					0.07				
21					0.30				
22	0.486	0.486			0.55	1.56			
23					2.07	2.07			2.070
24					2.24	2.24			2.232
25	1.566	(1.45)		1.452	2.03	(2.03)			2.035
26				1.600	3.82				3.824
27		1.57			-	3.92			
28		4.42	4.42	2.000	6.00	4.67	4.67		6.000
29		4.02	4.02	2.500	-	5.40	5.40		5.600
30	3.530	2.32	2.32	4.000	6.26	5.82	5.82	6.30	6.255
31		2.38	2.38	4.500	6.98	5.47	5.47	7.00	6.980
32		2.02	2.02	5.20	7.15	6.59	6.59	7.20	7.15
33	6.271	2.13	2.13	6.27	9.37	5.97	5.97	9.40	9.37
34	5.181	1.61	1.61	5.18	8.42	5.36	5.36	8.40	8.42
35	7.378	2.01	2.01	7.38	10.92	6.77	6.77	10.90	10.93
36	8.68			8.68	12.69			12.70	12.69
37	13.40	【自然と 社会 - 北 陸 -】 52号		13.40	14.04			14.00	13.00
38	15.00			13.90	18.00			18.00	18.00
39	16.99			13.90	18.00			18.00	18.00
40	18.22	昭61			18.00	【石川県山 中漆器産地 中小企業 振興ビジョ ン】 昭54 石川県		18.00	
41	20.62	福井, 富山		16.68	25~30.00			18.00	25.~30.
42	22.87	石川地理学 会		18.10	40.00		37.00	30.	
43	18.50			18.50	(石名 川古 県屋 商商 工工 要局 覧報 に及 よび る)	【石川県観 光物産課事 務概要】 昭61	45.10	40.	
44	33.42			20.40			昭54 石川県	58.00	40.
45	46.79	46.79	【石川県観 光物産課事 務概要】	45.		昭61	65.50	58.	
46	65.50	65.50	昭61	55.			67.00	65.	
47	81.88	81.88		67.				100.	
48	90.07	90.07		80.		140.00	石川県	98.	
49	90.97	90.97	石川県	88.		140.00		90.	
50	100.13	100.13		84.		150.00	山 中 漆 器 商 工 組 合 に よ る	120.	
51	105.14	105.14		95.		183.00		150.	
52	110.39	110.39		100.		192.00	192.00	210.	
53	112.60	112.60	100.00	110.		209.00	209.00	209.	
54	135.00	135.00	125.00	125.			195.00	195.	
55	150.00	150.00	140.00	140.			220.00	220.	
56	155.00	155.00	150.00	150.			220.00	220.	
57	145.00	145.00	145.00	145.			250.00	215.	
58		140.00	140.00	140.			280.00	280.	
59		140.00	140.00	140.			330.00	330.	
60		140.00	140.00	140.			350.00	330.	

( ) 推定。

統計の資料を利用したいが、掲載年次が限られていることから、以下の論述は昭和28年より同35年に亘り資料の得られる鉱工業生産統計によってみたいと思う。

なお、これ以降は商工要覧の資料が利用できるが、この資料は年次により内容に精粗があり、編年的な考察には不便な点があるように思われる。したがって、その資料的特色を活かして、今後随時利用していきたい。

他方、昭和52年以降は商工要覧の数値とも一致している『石川県観光物産課事務概要』の資料がある。これは概数的な点もあるが、産地別の実態に則したものと考えられるので、これを用いて考察することとした。

## (2) 昭和30年前後

戦後の昭和20年代は漆器産業の復興の時期であり、生産は増大傾向を辿っていたと推察される。しかし、図2により、昭和28年以降をみると、この傾向は昭和29年をピークに以

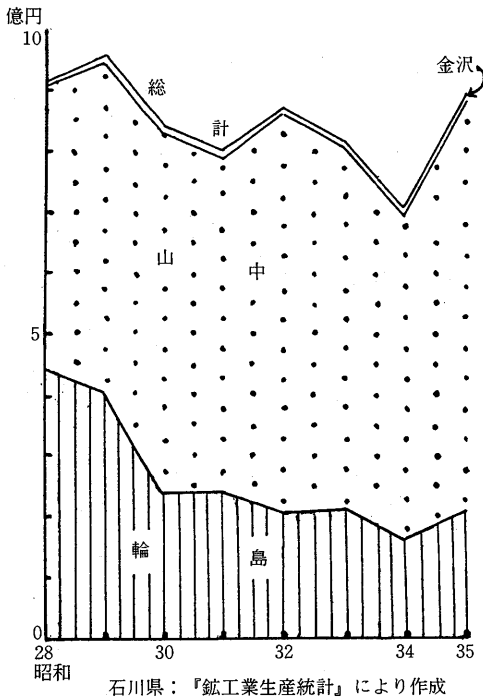


図2 産地別漆器生産額の推移(昭和28~35年)

表3 産地別漆器生産額構成比の推移

	石川県生産額	輪島	山中	金沢
昭和28年	9.21 億円	49.7%	50.7%	1.4%
29	9.55	42.1	56.6	1.3
30	8.43	27.5	69.0	3.4
31	8.03	29.7	68.1	2.3
32	8.74	23.1	75.4	1.5
33	8.23	25.8	72.5	1.7
34	7.06	22.8	76.0	1.2
35	8.89	22.6	76.1	1.2

石川県『鉱工業生産統計』により作成。

後減少傾向を示し、同34年を最低に以降は上昇に転じたように見受けられ、わが国経済の高度成長と軌を一にしたようである。ところで、3産地の比重をみると、山中が大きなシェアを持ち、輪島は昭和28年の4.4億円を最高として、減少傾向をたどっている点が注目される。山中は昭和28年の4.67億円から同35年には6.77億円へと伸長した。一方、金沢は極めてその比重は小さく、1億円台に止まっている年次が多かったのも特色といえよう。いま、その推移を構成比でみると、表3のようで、昭和28年に輪島49.7%、山中50.7%と両産地は伯仲し、石川県下の漆器生産額をほぼ二分していた。ところが翌29年以降、山中は漸次比率を増し、同35年には76.1%と県下生産額の3/4を占めるほどに発展した点は注目に値する。逆に輪島は40%台から比率を減じ、同35年には22.6%までにも減退した。当時、輪島へ聞き取り調査に赴いたが、山中の隆盛に対し、大きなあせりを業者が訴えていたことをいまでも印象深く記憶している。この統計数値を見てもこれは当然といえよう。両産地の隆替に対して、金沢はほぼ1%台に止りつつも、安定している点は特色とみられる。昭和20代の復興期のあと、3産地はそれぞれに顕著な特徴を示して、独自の歩みを進めていたことが伺われる。

ところで、戦前までは生産額において輪島は圧倒的な地位を保ち、山中をはるかに凌い

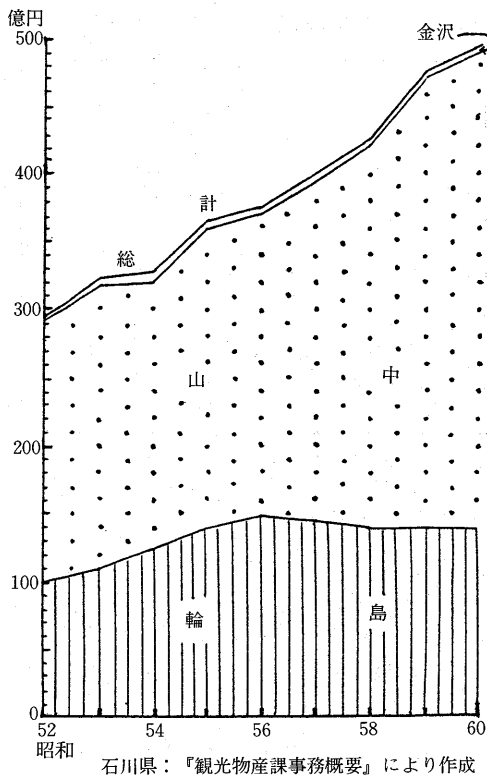
ていた。一例として昭和10年の実績を『石川県統計書』でみると、石川県の漆器産出価額372.8万円のうち鳳至郡（輪島に相当）は225.4万円と60%を占め、江沼郡（山中に相当）は67.8万円と18%、他方、金沢は57.8万円と15.5%を示していた。輪島と山中の比率は現在と逆転しており、輪島が生産額の面でも極めて高い地位を保っていたことが認められる。また金沢が近年に比較してはるかに高い比重を占めていたことも注目される。輪島・山中両産地の生産額上の地位逆転の時期を示す資料は入手できず残念に思っているが、戦後昭和22年の生産額ですでに山中は1.555億円で、4,895万円の輪島を超えていた<sup>13)</sup>ことから、その逆転は戦後早い時期と想像される。

高度経済成長期は漆器産業にとっても発展を招来し、生産額も増大した。その動向は表2の『石川県商工要覧』の数値によっても理解できる。

### (3) 昭和50年以降

その後、オイルショック以降の状態については、図3により近年までの推移をみることにする。ただ、この資料は『鉱工業統計』ほどの厳密性には欠けると思われるものの、その推移から各産地の傾向を比較しうことは充分可能といつてよいと考える。石川県総生産額は昭和52年の約300億円から同60年には約500億円と漸増した。このうち輪島は昭和56年の150億円をピークとして100億円台に止まるものの、微増傾向を示している。山中は山中町のほか隣接の加賀市へも産地が展延したものを包含しているが、増加傾向を示し、昭和52年の192億円から同60年の350億円へと伸長した。県下の約7割を占める点は昭和30年代と変わらない。金沢は4億円前後であり、約1%を占める点も昭和30年代と同様である。

ただ山中の生産額のうち、約1割が木製漆器であり、あとの主体はプラスチック製品であることが大きな特色である。本来の木製漆



石川県：『観光物産課事務概要』により作成  
図3 産地別漆器生産額の推移(昭和52~60年)

器の生産において、輪島は質的にも量的にも傑出した地位を保っていることは注目すべき点である。輪島と山中は対象的な特色をもちつつ発展している点は興味深いところである。

## 4 生産構造

### (1) 昭和30年前後

#### ① 資料について

石川県の漆器生産の実態を表4でみよう。

『鉱工業生産統計』は前述のように抽出調査であり、『工業統計』は全事業所を包含するものである。その比較では調査方法や対象に相異はあるものの、対象の企業数の開きが最も大きく、4人以上の事業所の占める比率は工場数で40~50%であるのに対して、従業者数で80%台と高くなるものの、生産額で80~70%となる。ここで扱う産地別の資料は『鉱工業生産統計』に據らざるを得ないが、全体



表4 石川県漆器製造業関係資料の比較

		昭和30年	32	33
工場数又は 事業所数	A	198	209	209
		45.6 %	52.9	50.5
従業員数	A	2,257	2,504	2,465
		85.9	81.9	80.5
生産額又は 製造品出荷額等	A	84,334万円	87,360	82,314
	B	88.9	78.3	77.4
	B	94,837	111,588	106,319

A 石川県：『鉱工業生産統計』。  
B 石川県：『工業統計』による。  
ゴチックはA/Bの比率。

像と比較すると、この資料は企業数では約半数であるものの、従業員・生産額などではほぼ8割程度の実態を示すものとして理解できよう。

こうした点を配慮して表5をみよう。工場数はこの期間に増加傾向を示すが、昭和32～33年をピークにしている。従業員数も昭和32年をピークにあと減少し、同35年は同28年を若干下回る点注目される。生産個数は波があるものの、増加傾向であるのに対して、生産額は昭和29年を最高として減少傾向を辿っている点、大きな特色といえよう。高度経済成長へと進む前提において、石川県下の漆器製造業は昭和20代の回復のあと、やや沈滞気味であったことを注目しておこう。その実態は3産地の生産事情を分析することによって、以下明らかにしていきたいと思うものである。

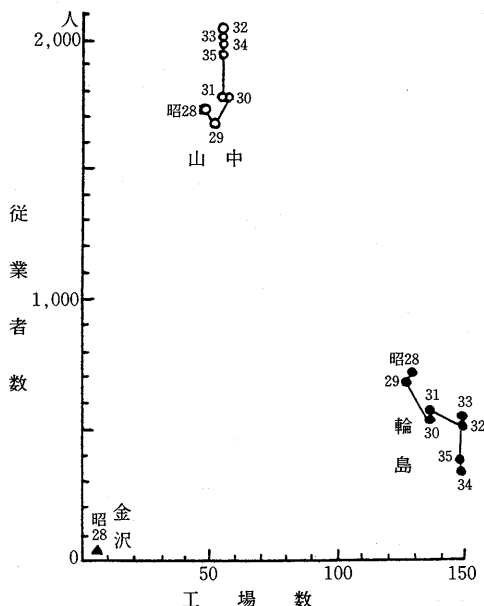
② 工場数・従業員数・生産額

つぎに3漆器産地の実態をみることにする。まず、工場数と従業員数との面からみよう。図4で両者の関係とその推移をみると、3産地はそれぞれに特色を示している。すなわち、山中は企業数少なく従業員多数、したがって工場規模は比較的大であることが知られる。これに対して輪島は逆で、工場数多く従業員

表5 石川県の漆器生産統計（昭和28～35年）

	工場数	従業員数	個 数 (生産高)	生 産 額
昭和28年	184	2,362人	620.0万個	9億2119万円
29	184	2,286	612.9	9,5460
30	198	2,257	605.5	8,4334
31	196	2,278	482.1	8,0312
32	209	2,504	598.3	8,7360
33	209	2,465	704.9	8,2314
34	204	2,351	862.8	7,0573
35	203	2,326	1,155.7	8,8949

表3と同じ。



石川県：『鉱工業生産統計』により作成

図4 漆器産地別工場数と従業員数との推移（昭和28～35年）

数は少なく、工場規模は零細である。また金沢は両者ともに極小である。グラフのなかで3産地は三様に分布して、特色をそれぞれ示していることが知られる。

さらに図4で昭和28年より同35年に至る推移をみると、山中は昭和28年の49工場、従業員1,719人から漸増して同32年はピークの55工場、2,041人となり、同35年には55工場、1,946人で、ともに増加傾向を示している。

一方、輪島は逆に従業者数は減少傾向を辿っており、昭和28年の129工場、従業者610人が同35年には146工場、373人となった。ただ工場数は若干増加していることからして、その零細性はいっそう著しくなったといえる。他方、さらに零細な金沢はあまりにも小規模で、その推移を図示し得ないが、昭和28年の6工場、従業者33人が同35年には2工場、7人と激減している。この間、昭和32年には5工場、53人を示したものの、このあと減少の一途を辿ってきているのである。

いま前記と同様に戦前の昭和10年の実態（『石川県統計書』）と比較してみると、金沢が175工場、従業者332人で、著しく規模の大きかったことが知られる。一方、輪島（鳳至郡）は432工場、810人で、いっそう産地としての規模は大であった。山中（江沼郡）は296工場、1,012人で、工場は少なかったものの、従業者数ではほぼ県の半数であり、山中の産地としての発展が明確に認められる。戦前レベルへの復興という点からすれば、調査に差はあるものの、山中を除いてはそれを達していないということになるうか。

つぎに、表6により1工場当たり従業者数

表6 産地別1工場当たり従業者数

	石川県計	輪島	山中	金沢
昭和28年	12.8人	4.7	35.1	5.5
29	12.4	4.6	32.7	4.7
30	11.4	3.2	31.5	9.8
31	11.6	3.4	32.1	10.2
32	12.0	2.8	37.1	10.6
33	11.8	2.8	36.5	8.2
34	11.5	2.3	36.3	7.0
35	11.5	2.6	35.4	3.5

表3と同じ。

をみると、さらに各産地の特色が明らかになる。石川県の平均値は12~11人程度で減少傾向を示しているが、輪島は昭和28年の4.7人から同35年の2.6人へと一途に減少の道を辿った。金沢は昭和31、32年に10人台を示して規模拡大をしたものの、全体としては縮小傾向であり、輪島を僅かに上回る規模である。これに対して山中は1桁規模が大きく、30人台を示している。しかし、傾向としては規模拡大とはいえず、安定した規模を保っているとみられる。

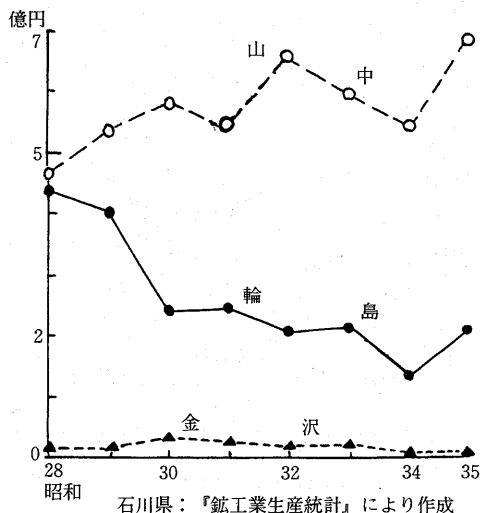


図5 漆器産地別生産額の推移(昭和28~35年)

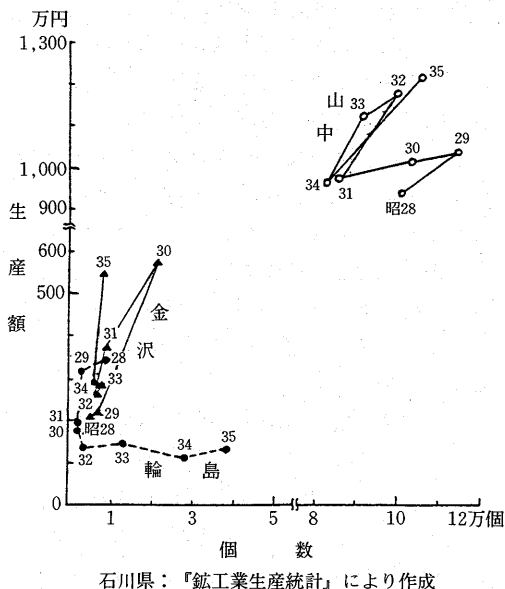


図6 産地別1工場当たり生産高(個数)・生産額の関係

では生産額はどうか。すでに図2でみたものの、別の角度で図5をみれば昭和28年、山中・輪島は4億円台にあり、ほぼ近似の生産額をしめしていた。ところが山中はこれ以後に増減の波はあるものの増加傾向を示し、同35年には6億7700万円に達した。一方、輪島は減少傾向を辿り、同35年にはやや前年を上回ったものの、2億140万円に止まった。物価上昇を配慮すれば、生産額の減少はいっそう著しい生産減を示しているものといえよう。金沢は僅かに1,000万円台を保っているが、昭和30年の2,919万円をピークに以後減少傾向を示している。3産地はそれぞれ傾向を異にし、山中の上昇、輪島の下降、金沢の停滞と、一応極めて簡明的であるともいえようが、まとめておこう。

### ③ 生産高・単価

『鉱工業生産統計』には生産高を個数で示してある。いま1工場当たりの生産高と生産額との関係を分析してみる(図6)。個数による生産高は多彩な製品のあること、産地により製品の質に相異のあることなどを考えると、的確な資料とは思われない。しかし、ここでは一応の目安と考えて掲載されている資料を分析してみることにした。まず気をつく点は山中に対して輪島と金沢は類似しており、大きく2つのタイプに分類されよう。1工場当たりの実績では、山中は生産高・生産額ともに大であり、輪島・金沢は全く逆で、ともに小であることを大きな特色とする。前述の規模の大小とあわせ、生産量・額の多少ともよく相関し、ここでは二極に明瞭に分かれていることが知られる。

さらに昭和28年より同35年への推移を同図でみると、山中は年次により変動が著しいが、個数で8~11万個、生産額で9~12万円代に位置する。なお個数と生産額は相関し、昭和29・32・35年がともに増大している一方、同28・31・34年は減退している。一方、金沢は昭和30・35年が生産額において増大している

ものの500万円に止まり、個数も同30年の2万個程度を最多とする。一般的には1万個以下の個数と、2~300万円台に止まる。輪島は生産高で変動があり、昭和30・31年では1,000個台に減少したものが、以後漸次増大し、3万9599個を同35年は示した。しかし、生産額では昭和28年の342万円から減退傾向を辿り、同30年以降は100万円台に停滞している。同一のグループに属するとはいっても、金沢・輪島は仔細にみると傾向を若干異にし、金沢が生産額の増加傾向を示しているのにたいして、輪島は逆に減少し、ついで低迷に移行し、生産高のみを増大してきているのである。伝統工業のうちでもとくに輝かしい伝統

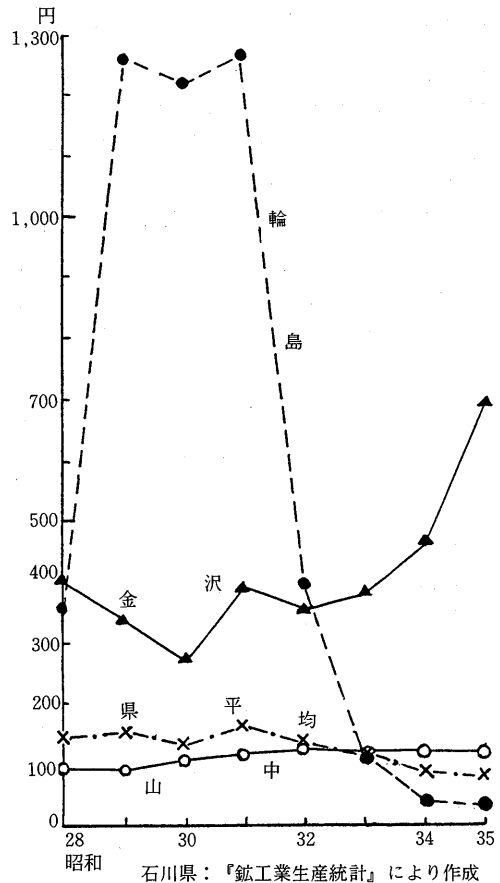


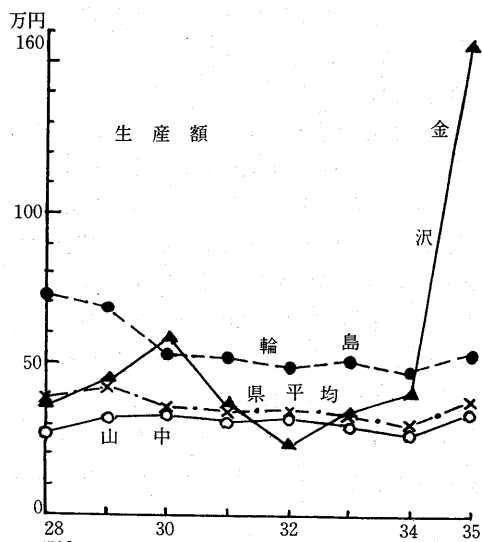
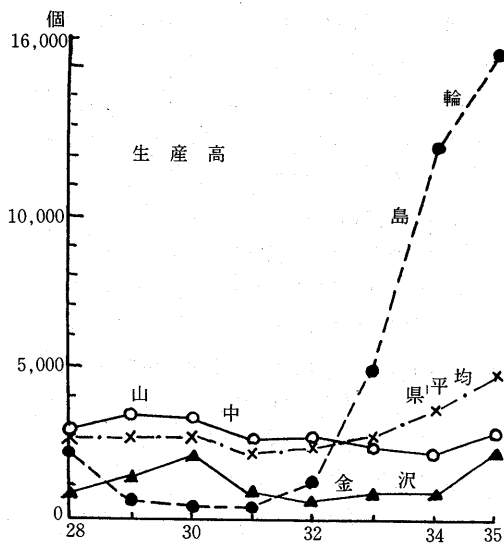
図7 産地別製品1個当たり生産額の推移 (昭和28~35年)

をもってきている輪島において、1工場当たりの生産量がかくも停滞的である点、改めて注目されたのである。

つぎに製品1個当たり生産額すなわち製品の単価を比較してみよう。図7でみると、山中は100円前後を示し、若干の上昇傾向を辿っているが、製品の安価性に特色のあることを如実に示している。石川県平均の価格もほぼ山中に類似した傾向を示しており、100円台を保ちつつも、昭和34年以降はこれを割り、価格の低下傾向を示している点が山中とは逆である。金沢は300~400円台を保持し、さすがに高級漆器産地の実績を示しているといえる。昭和30年に低迷して277円に低下するものの、あと上昇傾向を辿り、同35年には696円を示している点、注目されよう。以上がほぼ一定の方向性を示して推移してきたのに対して、輪島は著しい変動を示している。昭和28年の輪島の単価は352円で、金沢の403円に近似していたが、翌年は1,260円に急上昇し、これが持続したものの、同32年には急落して394円となり、これ以降もこの急落傾向は持続し、同35年には35円と他産地などに比しても最低を示している。伝統性を保持し、安定的な生産を維持してきたと思われる輪島がどのように著しい単価変動を示していたことは、生産事情にも著しい変化のあったことを推察させるものである。この時期において輪島の漆器生産には多くの問題があったことを予想されるのである。当時の聞き取り調査でも、輪島の漆器産業を支えているのは、漆を用いずカシュー利用の廉価な「箸」であると、嘆じて話された業者のことが回想される。

#### ④ 労働の生産性

では労働の生産性はどうか。従業者1人当たりの生産高と生産額とを図8でみよう。生産高では山中が同様に県平均に近く、2,000~3,000個台に納まっている。昭和29年が最高で3,458個を示したが、以降は若干の減退傾向を辿り、同35年はやや回復して2,960個



石川県：『鉱工業生産統計』により作成  
 図8 産地別従業者1人当たり生産の推移 (昭和28~35年)

となった。県平均もこれに類似し、2,000個台であるが、同31年を最低の2,117個とし、以後上昇に転じ、同35年には4,969個を示した。金沢は昭和32年686個を最低、同35年の2,261個を最高とし、安定的であるが、量的には山中・県平均よりは少ないカーブを示す。輪島はこの面でも変動幅が著しく大きい。昭

和31年は最低の410個で金沢よりも下回っているのであるが、このあと著増傾向を辿り、同35年には15,500個と抜群の生産高を示すに至った点注目される。この面においても輪島は著しい特色を示している。

つぎに生産額をみよう。輪島・県平均・山中はほぼ類似の傾向で、激しい変動はみられない。このうち輪島は水準が若干高く、70～50万円を保っているが、ただ昭和28年の72万円を最高にして、爾後減少傾向を示す点特色といえよう。県平均は30万円台にあるものの、山中はこれよりも下回り、最低のカーブを描くが、昭和35年の34.8万円を最高として、30万円前後に停滞している。ところが金沢は変動が著しく、昭和32年の24万円が最低を示すかと思うと、同35年は157万円と傑出した金額を示している。また各年次により変化の激しい点も特色である。

これら統計資料を通観すると、石川県平均の傾向に最も近いのは山中であるといえよう。これは山中が3産地のうちでは量的に最大であることの反映とみられる。表7でも明らかなように、工場数を除いては山中が従業者・個数・生産額において50%以上を占め、70～80%に及ぶものもあることが県平均の傾向に近似する所以といえよう。

なお、金沢の比重はいっそう低下しており、その漆器生産は産業というよりは、むしろ工

芸という方が適切とみられてもいる<sup>14)</sup>ほどである。

## (2) 昭和40年代

前述のように、昭和40年代については商工要覧の統計資料に依らなくてはならない。ただこの時期は石川県下の漆器生産に大きな変化があり、極めて注目してよい時期といえる。全国的にはわが国経済が高度成長を著しく推進した時代であり、そして昭和48年からはオイルショックを契機に低成長へと移行し、大きな経済変動をした時期でもある。

かような大きな経済変動を背景にして、石川県下の漆器産地は構造的にも大きな変化を遂げた。すでに昭和29年ころより、漆器の素地にプラスチックが導入されたが、これを受け入れたのは山中であった。昭和30年代には山中の漆器生産は前述のように進展し、低迷する輪島を動揺させた。さらに山中ではその発展の方策として、昭和38年に山中漆器工場団地組合と加賀山中漆器生産団地組合とが設立され、山中町・加賀市に2つの漆器団地が昭和42年に完成した<sup>15)</sup>。これまでの狭隘な溪間を埋めつくした温泉街に立地する生産の場<sup>16)</sup>のほかに新しい団地を加え、発展を期したのがある。こののち、昭和43年さらに山中漆器工業団地に1団地が設けられた<sup>11)</sup>。これらの生産の主体はプラスチック製品であり、斬新なデザインを創出する伝統的な体質をもって発展した。この背景には所得の増大、観光ブーム、プライダルブームの進展などがあり、これらが山中漆器発展の条件をなした。ところでこれらの条件は輪島漆器にも作用し、能登観光ブームのもとで、七尾線終着点の輪島が観光基地となり、朝市や民家・民俗などに特色をもつ能登の文化とあわせ、輪島には観光客が集中し、漆器はそのみやげ品として新たな販路を拡大した。さらに所得の増大から、高級な各種漆器製品の需要も高まってきたのである。

しかし、両産地を比較すると、山中の進展

表7 産地別漆器製造諸元の構成比

	輪 島		山 中		金 沢	
	昭28年	35	28	35	28	35
工 場 数	70.1%	71.9	26.7	27.1	3.3	1.0
従 業 者 数	25.8	16.0	72.8	83.7	1.4	0.3
個 数	20.3	50.0	79.3	49.3	0.5	0.1
生 産 額	49.7	22.6	50.7	76.1	1.4	1.2

表3に同じ。

がいっそう目覚しく、輪島を凌駕していたのである。ところが、昭和40年代中期から山中の製品はあきられ、漆器の本物志向が目立ってきた<sup>17)</sup>。ここに伝統の技法を忠実に保持してきた輪島の製品が注目され、高価ながらも販路を拡大した。一方、山中は停滞気味になり、両産地の明暗は逆転する傾向となったのである。さらにオイルショックの波もかぶることとなった。

ここで山中も本来の伝統の再盛を期し、その市場評価を高めるべく努力するに至った。ただし、プラスチックへの移行により、その回生は困難とする評価<sup>18)</sup>もあったが、筆者はその伝統的技法が一瞬ともいえる短期間に消滅するとは考えられなかった。地元の研究結果もまた同様な立場<sup>19)</sup>で、山中の伝統的技法の回復、発展を期したのである。その結果、木製漆器生産は前述のようになったのである。ただし、主流はプラスチック製品であることに変わりはない。全国的にみても、漆を主体に木製漆器の生産を持続してきている産地は輪島と高山<sup>20)</sup>とされ、外には木曾漆器の平沢も同様であるが、その他の産地はプラスチック生産を軽重の差はあるものの導入している。ただ一般の漆器製品の需要をまかなううえからは、本物のみでは量的にも、価格的にもまかない切れないのは現実である。かような変動を含みつつ、昭和50年代へと移っていった。その実情をつぎにみることにしよう。

## (2) 昭和50年以降

### ① 資料について

昭和50年以降の3産地別の統計資料としては、前にも利用した石川県商工労働部観光物産課のものに頼らざるを得ない。いまこの資料を、全事業所を対象にまとめられた『工業統計調査都道府県別産業細分類表』の昭和55年、58年の両年次のもの<sup>21)</sup>と比較検討してみよう。一般に観光物産課資料は数値が大きい。昭和55年では事業所数が1,756で、細分

類表の934より著しく大きく、従業者数はそれぞれ7,645人、3,815人と開き、生産額では364.5億円と109.9億円とさらに較差が大きい。同58年については、同様に事業所数は1,686,999であり、従業者数は7,547人と3,913人を示し、生産額では494.5億円、211.9億円となっている。前者は後者の約倍にもあたる数値を示している。調査の方法にかなりの差異があるものと思われるが、この相異は余りにも大きすぎよう。かように伝統産業の統計は資料により、著しい数値に差異のあるのが一般であり、この点は石川県下の漆器製造業にもあてはまる。したがって、単純に数値の比較はできかねるものである。ここでは前者の資料によって、最近の3漆器産地の動向をみることにする。これは同一の編年の調査資料であり、実情を知悉する県の担当課の資料であるので、その推移をみることは可能といえよう。なお、この資料は企業数、従業者数、生産額のいずれをみても、概数的なものであることから、厳密な分析はあまり意味のないものとみられるのである。

### ② 生産の実態

まず3産地別に、昭和54・57・60年と最近の実態を比較してみよう(表8)。上述のように数値は厳密性を欠く面はあるとしても、各産地の推移は把握でき、特色も理解できる。企業数では昭和60年の輪島を除いて、ともに減少傾向を示している点、大きな特色といえよう。従業者数においても輪島・金沢はともに減少傾向であるが、ただ山中は若干の増加を辿っている点が注目される。生産額は一般的には物価の上昇もあって増加傾向を辿るものといえようが、輪島が昭和57年の145億円から同60年の140億円へと若干減少している点、伸び悩みといえようし、金沢も両年次とも4.5億円を示し、停滞的である。ただ山中のみが増大している点が特筆される。

つぎに同表での構成比率から、各産地の実勢力をみると、まず金沢が企業数・従業者

表8 産地別企業数・従業者数・生産額およびそれらの構成比の推移

		企 業 数				従 業 者 数				生 産 額			
		計	輪 島	山 中	金 沢	計	輪 島	山 中	金 沢	計	輪 島	山 中	金 沢
昭和54年	実数 %	1792	769 42.9	955 53.3	68 3.8	7,489 人	2,438 32.5	4,900 65.4	157 2.1	億円 324.2	125 38.6	195 60.1	4.2 1.3
57	実数 %	1672	670 40.0	950 56.8	52 3.1	7,751	2,580 33.3	5,000 64.5	171 2.2	399.5	145 36.3	250 62.6	4.5 1.1
60	実数 %	1686	688 40.8	950 56.3	48 2.8	7,547	2,400 31.8	5,000 66.3	147 1.9	494.5	140 28.3	350 70.8	4.5 0.9

石川県：『観光物産課事務概要』により作成。

数・生産額ともに極めて僅少な数値を示している。企業数では3%台で、しかも昭和60年には2.8%となり、従業者数も比率は下向傾向で2%前後であり、生産額ではさらに比率は小さく、1%前後にもなっている。その漆器製品の質の高いことは注目されるものの、産地としての力量は乏しく、昭和30年前後とさして相異はない。むしろ工芸面からの評価が適切な産地といつてよいと思う。実質的な産地、輪島・山中は生産規模の面からも双璧をなすもので、企業数では輪島4、山中6であり、従業者数で3：7、生産額では4：6から3：7へと移行している。これら3年次の推移をみると、輪島の比率は3項目のどの面からしても下降気味であり、山中は比率上昇傾向で、とくに生産額においてこの傾向の顕著なことが認められる。

いま、3産地の推移を、前述の昭和10年の実績から辿ってみると、昭和20年代、戦後の高度経済成長期の資料を欠くものの、金沢の実績が著しく退行してしまっていることが挙げられる。ついで輪島が戦前の生産面での傑出性が戦後失われ、漸次退行傾向にあることが知られ、近年は山中の半分以下の比重であることが注目される。一方、山中は逆に生産規模を拡大し、石川県下の生産の7割を占めるに至った点、目覚ましい発展といえよう。すでに昭和53年の実態でも山中は企業数・生

産額で全国第1位にあり、従業者数で第2位（第1位は会津塗）を示し、生産額の面も特筆に値する発展を遂げてきているのである<sup>6)</sup>。<sup>12)</sup> 山中は漆器産地として、戦後漸次その地位を高めてき、首位の座を占めるに至った点は大きな特色といえよう。

一方、輪島は生産額・従業者数で全国第4位、企業数では第3位と高い地位を占め、かつ質的には全国最高の技術水準を保持している点は見逃してはならないところである。輪島・山中はそれぞれに特色を示して全国のトップに立つもので、それに優秀性をもつ金沢を加えると、石川県の漆器製造業は全国的にも量質の両面からして、追隨をゆるさない地位を保持しているといえるのである。

### ③ 生産構造

まず産地別に1企業当たりの実態をみよう（表9）。従業者数では昭和60年に1企業当たり、県平均が4.5人に対して、山中は5.3人と上回り、若干規模の大きいことが知られる。他方、輪島は3.5人、金沢は3.1人と下回る。この傾向は昭和54年においても同じであり、同57年にはどの産地でも従業者を増していたのであるが、同60年はやや従業者数を縮小している点、共通的である。山中が輪島に比べ、平均2人程度従業者規模を大きくしていること、県下の産地は全般に昭和57年ころに従業者規模を大きくし、同60年に縮小したことが

表9 産地別1企業当たり従業者数と生産額

	従業者数				生産額			
	石川県	輪島	山中	金沢	石川県	輪島	山中	金沢
昭和54年	4.2人	3.2	5.1	2.3	1,809万円	1,625	2,042	618
57	4.6	3.9	5.6	3.3	2,389	2,164	2,632	865
60	4.5	3.5	5.3	3.1	2,933	2,035	3,685	938

表8に同じ。

特色として認められる。これは石川県下の漆器産地の好況と近年の若干の退行とを示すものとみられる。

つぎに1企業当たり生産額では、石川県平均が昭和54年の1,800万円から増加し、同60年は2,933万円を示している。金沢は1,000万円以下、輪島が2,000万円前後であるのに対して、山中は2,000万円から同60年には3,685万円へと著しい伸びを示している。近年においても山中は着実に伸びてきたといえよう。

従業者の生産性を表10でみよう。昭和54年、輪島は最高で513万円を示し、山中・金沢を大きく引きはなし、県平均よりも高かった。さすが輪島としての高い付加価値をみることができた。この傾向は同57年にもみられたものの、山中の伸びが目立ち、同54年を100とした各産地の指数では同57年に輪島110に対して山中は128と著しい伸びを示した。他方、金沢は98と逆に低下した。山中の伸長傾向は

表10 産地別従業者1人当たり生産額

	計	輪島	山中	金沢
昭和54年	433万円 (100)	513 (100)	392 (100)	268 (100)
57	515 (119)	562 (110)	500 (128)	263 (98)
60	655 (151)	583 (114)	700 (179)	306 (114)

( ) 指数、表8に同じ。

同60年にも続いて700万円、指数179となり、輪島・県平均を金額・指数ともに凌駕した点が目立つ。一方、輪島・金沢の指数がともに114で県平均よりもともに下回っていることも特徴的である。

企業経営の面および、従業者の面よりみても、山中の近年における進展の著しい点が知られるが、これはまさに山中と輪島・金沢との漆器生産の構造・体質の相違を反映しているものといえる。

### むすび

石川県の漆器製造業が戦後全国で第1位の地位を確定し保持してきたことはすでに明らかにしたが、本稿においてはその石川県内漆器産地の進展を若干の資料により究明した。

石川県内の漆器産地は輪島・山中（加賀市を含む）・金沢の3産地より成る。この3産地は規模や製品その他において著しい特色のあることが明らかになった。それぞれに伝統を持つが、戦後に著しい発展を遂げてきたのは山中であり、停滞気味なのは輪島で、金沢は著しく小規模化してきている。製品は質的には輪島が伝統の技法をもって高級品を製し、金沢もまた同様で、とくに工芸品を製作している。これに対して山中はプラスチックを素材として大衆品を量産し、漆器団地を形成し、全国第1位の生産額をもつ点に特色をもつ。ただし伝統の技法も一部で保持している。輪島は全国第4位の生産額をもつとされ、伝統



の木製漆器生産の技術水準は高く、県立の研修機関をもつ点でも全国的に注目されている。

石川県下の3漆器産地の特色は極めて明確で、全国の漆器産地の縮図を示すもののように考えられる。かような発展の背景には各産地の伝統に特色のあることが関連するが、なお北陸ならびに各産地の社会・経済を含めた地理的条件が根底にあるように思われる。

本稿においては戦後の進展につき考察したが、さらに明治以降、終戦までの推移につき比較研究し、各産地の隆替を究明していきたい。そして、さらに各産地ごとの生産構造を詳しく分析するよう、研究を進めていく計画である。

本稿をまとめるに当たっては、かねてからお世話いただいた石川県統計情報課・観光物産課・行政資料センターに深甚の感謝の意を表すものである。

## 参考文献

- 1) 矢ヶ崎孝雄：戦後における漆器製造業の展開，商工金融，36-8，3-26，1986.
- 2) 矢ヶ崎孝雄：九谷焼一産業と文化の歴史一，日本経済評論社，1985.
- 3) 岡本啓志・石川県高等学校野外調査研究会：石川県の伝統産業，北国出版社，1977.
- 4) 石川県商工労働部観光物産課：昭和61年度観光物産課事務概要，1986.
- 5) 金崎肇・矢ヶ崎孝雄：石川県の工業発達史，北陸経済調査会，1971.
- 6) 石川県：石川県山中漆器産地中小企業振興ビジョン，1979.
- 7) 中野観象：石川県の漆器，金沢商工会議所，7-11，1933.
- 8) 輪島漆器商工業協同組合：伝統的工芸品の指定の申出書〔輪島塗（輪島漆器）〕，1975.
- 9) 山中漆器商工業協同組合：伝統的工芸品の指定の申出書（山中漆器），1975.
- 10) 金沢漆器商工業協同組合：伝統的工芸品の指定の申出書（金沢漆器），1980.
- 11) 中小企業庁・全国商工会連合会：小規模対策調査報告書，事例編，石川県山中町商工会地区における漆器産業の現状と展望，17-18，1973.
- 12) 山中漆器ビジョン作成委員会：山中漆器の現状と課題（試案），2，1979.
- 13) 石川県：石川県史。現代篇(3)，96-97，1964.
- 14) 新加能風土記編集委員会：新加能風土記，創土社，331，1979.
- 15) 国民金融公庫：山中漆器とその団地，3-5，1969.
- 16) 青野寿郎・尾留川正平：日本地誌 10，二宮書店，246，1970.
- 17) 前掲，12)，9.
- 18) 前掲，11)，22.
- 19) 石川県経済部中小企業総合指導所：山中漆器産地診断報告書，13-17，1980.
- 20) 日本漆工協会：現代日本漆工総覧，319，1976.
- 21) 通商産業調査会：昭和55年・昭和58年 工業統計調査 都道府県別産業細分類別表，1973・1975.